



HOSEI SPORTS INFORMATION MAIL MAGAZINE 26 準硬式野球部 本間 隆洋監督インタビュー

本間 隆洋監督 プロフィール

2005年より準硬式野球部のコーチとして就任し、2009年から企業でも勤務しながら準硬式野球部の監督を務める本間監督。企業勤めの忙しい日々でも週2~3日は朝9時から始まる部のミーティングに参加し、指導を行っている。

自身も法政大学出身だが、学生時代は「言われたことには全て『はい』と言う受信型が体育会らしさ」だったと懐かしむ。社会人になり、一旦は野球とは離れるが、監督になってから学生と接していく中で、現代の学生はとても器用だと感じるようになったそうだ。自分たちで考え、主体的に動けるような柔軟さを持った発信型の学生が多いと語る。今年の春に亡くなられた法政大学の五明公男先生からの声かけもあり、2009年から監督に就任。五明先生から教えてもらったことや、これまで法政大学の準硬式野球を築いてきた先輩たち、野球界の先輩から伝えられたことを大切に「社会に必要とされる人材の育成」を目指し、準硬式野球部の歴史を紡ぐ。2018年末に行われたオーストラリア遠征では、現地のプロチームに勝利。国内はもちろん海外でも成績を残し、活躍の場を広げている。



学生のうちから、 成果を残せる「ビジネスマン」を目指そう！

1946年に創立した準硬式野球部。マネージャーも含め全70名の部員が活躍している。甲子園経験者も多数在籍しており、東京六大学の中でも上位校として注目を集める。昨年末にはオーストラリアのプロチームに勝利し、益々の活躍が期待される準硬式野球部の本間監督に話を伺った。

「野球において必要な技術指導は特にはしていません。練習内容も彼らに任せていますね。大学生ですから、一から十まで強制はしません。では、どのような指導を行っているかという、社会でも通用する人間力が高められるような指導を心掛けています。毎朝行われるミーティングでは、ランダムに学生を指名して『今日の目標は？』と聞いています。シンプルな質問ですが、目的のない練習はあまり意味がありませんから、そこで何も答えられないようだと言った場合、喝を入れるんです（笑）。これから社会に出て、毎日会社に出勤するようになってからも日々目的意識をもって、何かひとつでもいいから成果を残せるビジネスマンになりなさい、それは野球でも同じことだと例え話を使って学生に伝えています。また、チーム全員が4番バッターやエースピッチャーにはなれませんが、一人一人がチームにとって必要な役割を考え、自分の力を最大限に活かせる場を見つけられる人間になれるよう、しつこいくらい伝え、指導しています。」

硬式？軟式？ 準硬式野球について



野球というと、プロ野球で使われている硬いボールの硬式を思い浮かべる人が多いと思います。もしくは、中学生が使う軟式の野球ではないでしょうか。

準硬式野球は、軟式野球の一種として発展し、ルールは一般的な野球と変わりません。違うのは試合で使用するボールで、硬式ボールの芯そのままに、軟式ボールの外側でつかわれているラバーで囲まれたボールを使用します。

高校時代に硬式野球をやってきた学生にとって、バッターへの影響はほとんどないようなのですが、ピッチャーはボールの感覚が大きく変わるため、握った時のグリップ感に慣れるまで時間がかかることも多いんだとか。関西圏で発展したという説もあるそうなので、気になる方はぜひ一度大会等で観戦しましょう！最新情報は準硬式野球部のホームページで確認いただけます。

法政大学準硬式野球部

公式ホームページ

<http://hoseijunko.web.fc2.com/>

チームカラーがないのが部のカラー。

社会に出てから活躍できる人材の育成が軸

現在70名のマネージャー含む学生のうち、約20名はスポーツ推薦で入部した学生だという。毎年新しい学生が入学してくる大学スポーツにおいて、準硬式野球部では何を大切にしているのか、そして今後について伺った。

「約15年ほど指導していますが、チームカラーがないのがカラーだと感じています。毎年学生のカラーに合わせてチームを作っています。これは社会に出ても、自分の役割を見つけていける訓練にもなると思っています。

また、野球というのは日本においてある種、国技のようなスポーツなので、社会に出たら『甲子園に出た』とか『大学の体育会で野球をしていた』というだけで注目が集まってしまうんです。

勝ち負けはもちろん大事ですが、『やっぱり法政大学の体育会出身の人は違うな』と一目をおかれる、そんな人材をこれからも育成していきたいと思っています。そのためには、挨拶など生活における基礎の部分を、人に言われなくても当たり前でできることが大切です。小さなことを継続してやっていけるのは才能ですからね。今後で言うと、学生たちには卒業後も準硬式野球の普及に努めてもらえたら嬉しいと思っています。自分たちがやって楽しかっただけで終わらせず、自分の子供へでもいいし、地域の野球クラブでもいいので、伝えてこそだと考えています。世界にもこの魅力を伝えて欲しいです。」



勝ち負けにはあまりこだわらないと言う監督だが、昨年の東京六大学春季リーグ戦では、10勝1敗、勝ち点5で完全優勝。今年は残念ながら優勝には届かなかったが、勝ち点4で2位という好成績をしっかりと収めている。

学生のうちから大人として扱われている選手たちが、社会に出てさらに活躍してくれることを楽しみに、今後の準硬式野球部に期待したい。